

み

ん

な

の

文

芸

*短歌は22作品を掲載します

中村琴江選 投稿数26句

小綏鶴のしきりに囃す立夏かな

(評)小綏鶴は竹林や笹のある雑木林を好み生息していて、大きく「コツコツコツ」や「チヨットトイ」と聞こえる鳴き声をする。と、野鳥の本にあります。立夏の日、心地よい身の引しまる空気を感じる作者なのです。

石楠花の句、枝先に蕾を集めて咲く石楠花蕾の先に紅色がのぞきはじめたところを詠まれた句です。淡紅色の開花を待つ作者の心が伝わってくる美しい表現です。一句とも初夏らしい秀句です。

石楠花の蕾割りつつ紅生るる

三沢 新井 民子

紺碧の空を切り裂く初燕

皆野 保科 従道

萌木山雨を喜ぶ色となる

皆野 根岸 詩子

薄紅の薔薇の館を巡るかな

皆野 原 和幸

白牡丹音もなくしてくずれけり

三沢 澤野 恒平

初に行く上州四万に春惜しむ

皆野 大沼 シヅ子

絵筆持ち初夏の山水岩置

皆野 関根 助市

そよ風に誘われ網戸水洗い

皆野 村田 ハツ代

燕来る昼を点して美容室

三沢 長谷河ソノ

百日紅一皮剥けてすべすべに

下日野沢 新井 進

草笛や思ひもよらずときめきを

皆野 市川 岳樹

母の日や夫が黙って花渡す

三沢 鈴木 貞恵

三沢 真下 杏子

曾孫等に綾取りしようと誘はれて赤き毛糸に心通はず
移り住む生涯の地や駒形に親交深まりはや八カ月
連日の新聞記事に戦争の体験実話を読み胸疼くなり
麦の秋つばめ飛び交う駒道に鈴の音かるく秩父巡礼
種を蒔く苗を植えた日書き記し見様見真似の菜園ノート
露を剥く婆と女将の宿在りて待たせたせず昼の膳に味はふ
地中にも届くほど歌ふ鶯に覗く荀雪かぶるかな
どこまでも続く大地の麦畑大麻生の空今日晴れるや
ボーリング始まる海にジユゴンいて墓地という字が墓地に似る意味
ダム建てりふる里離るる人々の誰が心にも残るふる里
地に忍びくる里離るる人々の誰が心にも残るふる里
御開帳詣でる人のぞろぞろと花満つる中善光寺参り
野菜苗種類多くて見て迷う元気そうなの求めて帰る
石垣にすわり居る爺ゆつたりと緑萌え立つ里山ながむ
困り事のたりくと迫り来て今日は鬱なり明日は躁なり
子供らは帰省の折に必ずや町報に目を通してゆきぬ
娘から「娘が行きます」とメール有り心おどらせ唇に記す
車窓よりはたはた泳ぐ鯉のぼり自由自在に親孫曾孫
ふてぶてしタンボボの花いとおしくそのままにして今もはびこる
出没の猪おそるも農たのしへナップ豌豆帰省子と摘む
五箇山で皆で聞き入る麦屋節そばと豆腐の味わい深し
ネパールでケガ人達を手術する日本医師達感動ニュース
仙台から仕事のまごが面会におぼろ目 Baba のぬくい手でもち

上日野沢 下日野沢

上日野沢 下日野沢

皆野 皆野

皆野 皆野